W・デ・モラエス著　岡村多希子訳
『モラエスの日本随想記　徳島の盆踊り』　講談社学術文庫

神戸大阪駐在ポルトガル国領事のヴェンセスラウ・デ・モラエスは、一九一三（大正二）年七月、五九才の時に、突如一切の公職から退いて終の栖と定めた徳島に移り住んだ。隠棲の理由は、祖国ポルトガルの政情不安、ならびに神戸時代に同棲していた福本ヨネの死であり、さらに神戸の外国人社会での人間関係に耐え難くなったからだともいう。

徳島に移ったのは、そこにおヨネの墓があったからだが、モラエスは二階建縦割り四軒長屋の一つ（彼は人形の家と呼ぶ）を借り、おヨネの姪のコハルを女中代わりに置いて生活を始める。本書『徳島の盆踊り』は、モラエスが愛しい死者（明らかにおヨネのことだが、モラエスは本書では彼女の名前をいっさい出さない）を思いつつ過ごした徳島での最初の一年余りの生活を綴った随筆である。

本書の前半で、モラエスは徳島でのなにげない風景や人々の暮らしを描く。当時の犬の飼い方（ほとんど野良犬状態）。人々の無頓着な時間間隔（神戸などの都会では号砲で時間を知らせたが、騒音で良く聞こえないから商店の時計はまちまちの時間を指している。徳島では時間を告知する鐘の音は良く聞こえるが、天候が悪ければ鐘は鳴らない）。毎朝かしわ手を打って太陽を拝む人々。家庭の中心を占めていた火鉢。映画館の客寄せのための品のない楽隊のマーチ。物売りの声。小さな女の子に「とーじん・さん」と呼ばれたこと（都会では既にイジンサンやガイコクジンに変わっていたはずだ）などなど。このようなさりげない記述が、当時の地方都市の雰囲気をよく伝えている。

本書の後半において、モラエスは日本における死をめぐる慣行を記述し、死者と生者の親しい関係を明らかにする。日本では死者は死なない、永遠に生きている。家族は仏壇に毎日お茶や食事を供え、香を焚く。そして、毎年盆には死者は家族を訪れ、一緒の時を過ごして帰っていく。

日本人の許には死者は戻って来るのに、モラエスの許に死者は訪れない。「私は死者に一度も会ったことがなく、その声を一度も聞いたことがなく、死者を一度も感じたことがありません！」。訪ねて来る死者を喜び迎える盆踊り。人々は心楽しく幸せにあふれて踊る。死者と会うことの出来ないモラエスは、盆踊りに背を向け悲しい心で家に帰る。モラエスは、もはや自分が属していない現世と近づきつつある死の世界の狭間にあって、死んだおヨネを「追慕」する日々を送る。

本書執筆後間もなく、コハルも死んでしまう。モラエスが愛しい死者をかすかに感じたのはそれから数年後のことだった。小雨降る夜に帰宅したが、暗くて鍵穴が見えない。突然、玄関先の木の枝から蛍が現れて、彼の周りを飛び回る。蛍の光が窮地を救った。モラエスは呟く、「おヨネだろうか・・・コハルだろうか・・・」。後に書かれた『おヨネとコハル』（岡村訳、彩流社）に出てくる話である。

モラエスは孤独のうちに、一九二九年数奇な生涯を終えた。

（中山和芳）